群教セ	G01－02
	平20.240集

意見文を適切に書く能力を高める小学校の国語科指導の工夫

――「書く視点」の作成と活用を通して ――

長期研修Ⅱ　研修員　　鯨井　文代

《研究の概要》

本研究は、意見文「日本語を考える」を書くために、説明的な文章教材の構成をとらえ、書き方の順序や筆者の着目点、表現の工夫などに気付かせた上で、児童の意見を整理して「書く視点」を作成する。その「書く視点」を踏まえて、意見文を書き進めて交流する中で、自分の表現上の参考にしたり、比較したり、推敲したりして「書く視点」を活用していけば、児童が適切な意見文を書く能力を高められるようになることを実践的に研究した。

キーワード　【意見文　書く能力　書く視点　表現の工夫　表現の良さ　日本語】

Ⅰ　主題設定の理由

今までも、国語科授業において、教材の中での筆者の思いや考えを正確に読み取り、「書くこと」の学習につなげるという、関連指導の取組は行われてきた。しかし、「書くこと」の学習では、日記や生活作文、観察記録文、感想文などを書く機会は設定していたが、筆者の考えについての自分の意見や感想をまとめるなど、「読むこと」の学習で学んだ知識や技能を活かして、書く能力を高めることにつなげることが不十分であった。

新学習指導要領の国語科では、思考力、判断力、表現力をはぐくむために、「正確に理解する能力」と「適切に表現する能力」とを連動させることで「伝え合う力」を高めていくことを重点目標としている。「伝え合う力」を身に付けさせるためには、国語科授業の中で、相手や目的、状況、場面に応じて、筋道を立てて、自分の思いや考えを伝え合う学習経験がますます重要となってくる。

そこで、学習を通して習得した能力を活用して「伝え合う力」が身に付いた児童を育てるためには、読むことを活かして書く、書くために読む、というように、「読むこと」と「書くこと」の学習をより適切に関連させる必要がある。

「読むこと」の学習では、筆者の要旨を正確にとらえるだけでなく、筆者の書きぶりや構成上の工夫を、筆者の意図に関連付けて読み、それを表現につなぐ読みが大切である。そして、根拠を明らかにした自分の意見を、交流を通し深め合うことにより、表現につないでいくことが重要である。

このように、「書く」ために「読む」学習活動の中で、筆者の書き方や表現の工夫を明らかにして、「書く視点」をまとめ、その「書く視点」を活用して書く活動を行えば、意見文を適切に書く能力を高められると考え、主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

複数の教材や文章を比較して表現のよさや違いに気付かせたり、自他の意見文を推敲して交流したりして、児童が「書く視点」を作成・活用することにより、意見文を適切に書く能力を高めることができることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　自分の考えをもつ過程では、複数の教材を読み、筆者の意見や根拠を明確にした書き方や表現の工夫をとらえ、「書く視点」を作成することにより、自分の考えを明確にもつことができるであろう。

2　自分の考えを深める過程では、教材文や自他の表現のよさや表現の効果について助言し合い「書く視点」を活用しながら意見文を書くことにより、自分の考えをさらに深めることができるであろう。

3　自分の考えをまとめる過程では、「書く視点」を活かして、自分の意見文を確かめ振り返り、推敲したり、交流したりすることにより、意見文を適切に書く能力を高められるであろう。

Ⅳ　研究の内容と方法

１　研究の内容

(1) 意見文を適切に書くとは

意見文とは、ある事柄に対して、自分の経験や知識を根拠として、自分の意見を筋道立てて書いた文章のことである。自分の思いや考えたことなどを相手に正しく理解してもらうためには、書き手の意図や内容を明確にして、正確な表記で表現することが大切である。

意見文を書く学習は、高学年の学習指導内容に位置付けられている。それは、児童の発達段階として、論理的に考えられ、事象と感想との区別ができるようになるからである。

児童は、目的や相手、自分の意図を明確にして、事実や根拠を明らかにした文章を書く学習経験を積むことにより、他の教科の学習や日常生活、実社会の中で、適切な意見を表現できるようになる。

したがって、意見文を適切に書くためには、根拠を基に、筋道を立てて、自分の意見を書くことが求められている。まず、ある事象に対して、どのような意見を、どう説明していくことが適切なのか、理解することが必要である。

次に、文章を読み、筆者の構成の工夫をとらえたり、その表現のよさや工夫による効果に気付いたりして、適切な書き方を具体的につかむことが大切である。そして、児童が書いた互いの意見文を読み合い、推敲し合うことで、意見文を適切に書く能力が高められると考える。

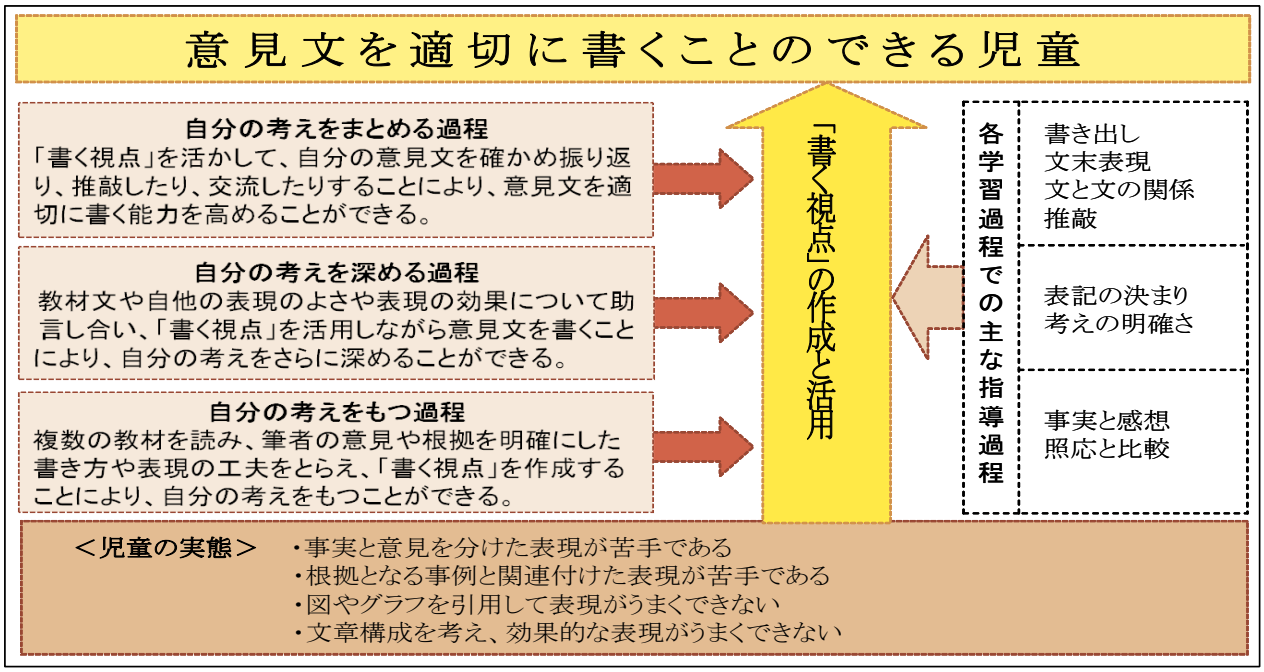
(2) 「書く視点」について

「書く視点」とは、意見文を書く際に、児童の拠り所となる視点のことである。書くことが苦手な児童にとって、「書く視点」を明らかにすることで、意見文の書き方を理解することができる。

「書く視点」としては、「事実と事象、事実と感想や意見の区別」「構成の効果、理由と根拠、順序や類別」「書き出し、文末表現、文と文の関係」「表記の決まり、考えの明確さ」などが挙げられる。これらの視点を各過程において有効に活かしていく必要がある。

「自分の考えをもつ過程」では、筆者を評価しながら結論と根拠の関係を読み進め、そこで気付いた筆者の書き方の工夫を自分たちの言葉で「書く視点」にまとめる。次の「自分の考えを深める過程」では、その「書く視点」を参考にしながら書いていくことで、今までの「読むこと」で取り出してきた意見文の文章構成、表現のよさ、表現の効果を確かめ意見文を書く。そして、「自分の考えをまとめる過程」では、グループごとの意見交流で「書く視点」を基にした相互評価を行う。さらに、自分の考えを確かめ、推敲の観点として「書く視点」を活用することで、よりよい意見文に仕上げていく。

このような学習を通して、意見文を適切に書く能力は、「書く視点」に沿って、自分の考えを意見文としてまとめる中で、構成や表現の工夫、効果などを確かめていくことで、高められていくと考える。



資料１　研究構想図

2　研究の方法

(1) 実践計画

対　象	５年	期　間	10月５日(月)～11月５日(水)　全14 時間
授業者	長期研修員　　鯨井　文代	単元名	課題を見付けて伝え合おう「日本語を考える」

(2) 抽出児

A	普段、作文や日記を書くことはとても意欲的であるが、ほとんどの場合、時系列に並べてしまい、筋道を立てて書くことが苦手である。表現の工夫のよさに気付かせるようにしたい。
B	話合いでは、意欲的に発表するが、根拠を明らかにして自分の意見を発言することは苦手である。文章の構成と理由や根拠の関係についてまとめられるようにしたい。

(3) 検証計画

検証計画	検　証　の　観　点	検　証　の　方　法
見通し１ 自分の考えをもつ過程	複数の教材を読み、筆者の意見や根拠を明確にした書き方や表現の工夫をとらえ、「書く視点」を作成することは、自分の考えをもつ上で有効であったか。	教材文の中で筆者が読み手に分かりやすいように配慮した書き方や表現の工夫に気付き、ワークシートに「書く視点」として記入することができているかどうか見取っていく。
見通し２ 自分の考えを深める過程	教材文や自他の表現のよさや表現の効果について助言し合い、「書く視点」を活用しながら意見文を書くことは、自分の考えをさらに深める上で有効であったか。	教材文や自他の文章から「書く視点」を活用して、評価し交流する様子を見取っていく。また、自分の意見文を書く際に、「書く視点」を活用しながら、記述や文章構成や表現の効果を考え、ワークシートにまとめることができているかどうか見取っていく。
見通し３ 自分の考えをまとめる過程	「書く視点」を活かして、自分の意見文を確かめ振り返り、推敲したり、交流したりすることは、意見文を適切に書く能力を高める上で有効であったか。	推敲や交流において、児童の書いた意見文を振り返り、「書く視点」を基に友達の意見等、比較したり、気付いたことをワークシートに記入したりできているかどうか見取っていく。

Ⅴ　研究の展開

1　単元名　　課題を見つけて伝え合おう
「日本語を考える」（教育出版５年下）

2　単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標

目的や意図に応じ、自分の考えを構成の効果を考えて、意見文を適切に書ける力を身に付ける。

（C 書くこと　内容イ）

(2) 評価規準

＜国語への関心・意欲・態度＞

自分の考えを交流し、構成の効果を考えて意見文を適切に書こうとしている。

＜書く能力＞

構成の効果を考えて、自分の考えを意見文として適切に書く力を身に付けている。

＜言語事項に対する知識・理解・技能＞

事実と根拠や主張などを示し、表現の工夫を考えて意見文を書いている。

3　指導計画（全14時間計画）

	主な学習活動	次	支援及び留意点	評価項目（評価方法）
見通し1	□マンガから日本語に対する自分の考えを書き、根拠を基に発表する。	1	・マンガ（新聞記事）から読み取れる情報について意見交流し、ワークシートに自分の考えを書かせる。	◇マンガの内容についての自分の考えを、根拠を基に書き、積極的に意見交流しようとしている。 読　ワークシート　関　観察
	□グラフから情報を取り出し、自分の感じたことを書き、意見交流する。	2	・グラフ（新聞記事）の中から情報を取り出して、分かることを確認して意見交流させる。	◇グラフから日本語に対する自分の考えをもち、ワークシートにまとめようとしている。 読　ワークシート　関　観察
	□教材文『日本語を考える』を読み、構成をとらえ、結論に対する自分の考えを書く。	3	・筆者の考えが書かれている事例（事象）を取り上げ、大段落に分け、結論に対する自分の考えをもたせる。	◇『日本語を考える』の全体の構成をつかみ、結論について自分の考えを書いている。 読　ワークシート　関　観察
	□文章全体をとらえて読み、要旨をまとめる。	4 5	・文章全体を読み、筆者が伝えたいことをまとめ、要旨をとらえさせる。	◇『日本語を考える』の文章全体の要旨をまとめている。 読　ワークシート　関　観察
	□結論と根拠についてとらえ、納得できる書き方の工夫を考える。	6	・結論と根拠の関係が、文章構成や具体例を挙げることで、分かりやすいことに気付かせる。	◇結論が根拠となっている事例や文章構成をまとめている。 読　ワークシート　関　観察
	□『日本語を考える』から、表現の工夫を「書く視点」にまとめる。	7	・教材の構成の効果など筆者の書き方の工夫について話し合わせ「書く視点」にまとめさせる。	◇筆者の書き方の工夫について話し合い、「書く視点」にまとめている。 読　ワークシート　関　観察
見通し2	□『日本語を考える』をテーマに、自分の思いや考えを構成メモに書く。	8	・『日本語を考える』への思いや考えを書き、何を根拠とすればよいか「書く視点」を基に、構成メモを書かせる。	◇『日本語を考える』のテーマでの自分の思いや考えを書き、根拠について構成メモを書こうとしている。 書　ワークシート　関　観察
	□自分の考えをまとめ、結論と根拠の関係を考え、「書く視点」を活用して意見文を書く。	9	・自分の考えをまとめ「書く視点」を活用し、結論と根拠の関係を考えながら『日本語を考える』の意見文を書くよう助言する。	◇自分の考えをまとめ、結論と根拠を考え「書く視点」を活用して『日本語を考える』の意見文を書いている。 書　ワークシート　関　観察
	□例文の意見文について「書く視点」と比較して考え、意見交流し、自分の意見文の工夫が効果的か振り返る。	10	・具体的な事例のない例文を取り上げ、表現の工夫について意見交流し「書く視点」と比較して考えさせ、自分の意見文の工夫が効果的か振り返らせる。	◇よい例と悪い例を取り挙げ表現の工夫について意見交流し「書く視点」と比較し考えることで、自分の意見文の工夫が効果的か振り返っている。 書　ワークシート　関　観察
	□グループごとに書き上げた意見文を交流し合い、構成の工夫を見つけ、相互評価し合う。	11	・グループごとに意見文を交流し相互評価させ、互いの文章のよい点と気付いた点を話し合うように助言する。	◇グループごとに書き上げた意見文を交流し、「書く視点」を活用して相互評価し合っている。 書　ワークシート　関　観察
	□「書く視点」を基に自分の意見文を推敲する。	12	・相互評価を参考に表記上の事柄や自分の考えの明確さなどにも目を向け、「書く視点」を活用して推敲させる。	◇相互評価を参考にして、表記上の事柄や、自分の考えの明確さなど「書く視点」を活用して推敲している。 書　ワークシート　関　観察
見通し3	□「書く視点」や推敲したことを活かして自分の意見文を仕上げる。	13	・推敲を活かして自分の意見文を書き直し「書く視点」から再度見直すようにさせる。	◇「書く視点」から見直しながら自分の意見文について書き直している。 書　ワークシート　関　観察
	□『日本語を考えよう』についての意見文を発表し合い、交流する。	14	・『日本語を考えよう』についての意見文の交流を行い、友達の意見を評価して聞かせる。	◇自分の意見文の表現のよさを確認し、伝え合う楽しさや意見文の自分の成長を実感している。 話・聞　ワークシート　関　観察

Ⅵ　結果と考察

１　複数の教材を読み、筆者の意見や根拠を明確にした書き方や表現の工夫をとらえ、「書く視点」を作成することは、自分の考えをもつ上で有効であったか。（見通し１）

この単元の学習に入るにあたり、まず児童に興味・関心をもたせ、日本語に対する意識を高めておく必要があった。そこで、導入では新聞記事のマンガ（言葉の制限がある世界での会話上の問題点を表現した内容）やグラフ（日本語の乱れについて調査し結果を分析した内容）を取り扱うことで、批判的に読ませる学習を構想した。

日本語については、普段あまり突き詰めて考えたことのない話題であるが、日本語を話題とした新聞記事のマンガやグラフから情報を取り出し、日常使っている言葉と比較して考えることで、ワークシートに自分の意見を書くことができた。そして、文章構成や表現の工夫をなかなか意識できずに、感想に偏ってしまう児童でも、教材文を書き手の立場に立って読ませたことで、表現の工夫を取り出すことができた。また、学年やクラスの児童同士で書き終えた意見文を交流する場の設定し、意欲付けを行った。

次は、児童Ａのワークシートへの記述である。

「日本語を乱している原因の半分は、円グラフからも分かるように、テレビである。それに日本語の乱れを感じている人は、5，000人中96パ―セントで、感じていない人が４パーセントの割合だと分かった。このことから、私は、言葉を省略しないで正しく言えばよいと思った。それに大人が気を付けたり、芸能人が正しい言葉づかいに直していったり、テレビ番組でも悪い言葉を使わないようにしてほしいと思った。「日本語を乱している原因は、円グラフからも分かるようにテレビの影響だ」と分かった。このことから、私は言葉を省略しないで正しく言えばいいと思った。そして大人が気を付けたり、芸能人が正しい言葉づかいに直したりして、テレビ番組でも省略語を使わないでほしいと思った。

資料２　児童Ａのワークシート

資料２の児童Ａは、日常の日本語が乱れているという内容に対して、その数値が表している意味に驚いたり、理由として挙げられている内容をつかんだりして自分の考えを表現している。自分の考えを根拠と結論との関係をきちんと結び付けて書き込むことはできていたが、文章構成をつかんでいる表現とは言えなかった。そこで、より適切な意見文を書かせるためには、どのような表現の方法があり、どこをどのように書いていけばよいのか気付せていった。

次は、児童Ｂのワークシートへの記述である。

私は、自分の気持ちが伝えられなかったり言いたいことが言えなかったりするので、実際そのような国には行きたくないと思いました。悪い言葉を使っていると自分もおかしくなってきてしまうし、使うこともよくないということを筆者は、伝えたかったのだと思います。だから、私はあまり悪い言葉は使わない方がよいと思いました。

資料３　児童Ｂのワークシート

資料３の児童Ｂについては、授業を通して普段何気なく使っている日本語に対して、自分の考えを書き込むことはできたが、内容を整理して、自分の生活と比較して具体的な事例を挙げた考えなど、分かりやすく表現をすることは苦手である。

そこで、実際の体験などから、誰でも経験している事例を並列して書くことで、資料からの情報と自分の体験が結び付き、結論につながる表現が説得力ある文章を書く上で必要であることを考えさせた。

すると、児童Ｂは、毎日使っている日本語が乱れているということを、教材（マンガやグラフ）の情報を取り出して、文章から問題意識をもって表現や特徴をとらえた。そして、その数値が表している意味に驚いたことや、理由として挙げられている内容に対して、本当にそうなのかと主体的、批判的に解釈したり、評価した考えを結び付けて、根拠とすることができた。

次に、説明的な文章の学習において、筆者の意見と根拠を明確にした書き方や筆者の表現の工夫について取り出し、「書く視点」にまとめた。文章の論理の展開や文章構成をつかんで、分かりやすい書き方を理解しながら、自分の考えをもつことができるような学習を行った。

その中で、筆者がなぜそのように表現をしたのかを考えさせる読みによって、筆者の述べている内容に対して、納得したか、あるいは納得できなかったかを話し合わせ、文章構成を読む学習活動を設定した。そのことにより、「書く視点」を取

り出すことにつなげられた。

ここでは、今までの説明的な文章の学習では不十分であった「根拠」を読む学習に時間をかけた。そうすることで、児童が「なぜ」「どうして」「そう思う根拠は」「どこに」「どのように」書かれているのか考え、表現の仕方の追求の学習を行うことができた。

こうして、筆者の立場になって読ませるために、文章中の表現や論理の展開・結論と根拠の結び付き・筆者の考えや主張との関係などに焦点を当てた学習を行ったところ、児童は次のように気付いて、「書く視点」を適切に文章中から取り出していくことができた。

- 事例は、二つ以上あったほうが、納得する。
- 事例は誰でも体験したことを取り上げる。
- 事例は、少しずつ視点や視野を広げ取り上げる。
- 事例は自分の考えの裏付け（理由）として必要である。身近なことを事例として挙げている。
- 根拠となる事実は、身近な事例ばかりではなく聞いたこと、報道からの情報や見たことも事実として取り上げる。
- 母親のことを事例にあげているので、誰にでも体験していることを挙げていて、分かりやすい。
- 二つの反対事例を取り上げ比較すると納得する。
- 二つの言葉を取り上げて書かれているので、比べて考えやすい。
- 「いただきます」は、給食のことを想像して考えることができたので、分かりやすい。
- 感謝の事例を二つの場面を取り上げて、読み手に考えさせようとしている。
- 表現の工夫として、文末表現に注意すること。
- 文末表現が「である」にそろえている。

資料４　意見交流から出てきた児童の気付き

実際の授業では、まず、「結論で述べている筆者の考えに、あなたは納得しましたか。」と発問した。すると、ほとんどの児童が事例の挙げ方について、「納得できた。」と述べた。しかし、最後の班から「納得できない。」という発言があった。理由は、「根拠となる事例が二つだけでは、結論とは言い難い。理由は……」という内容であった。このことをきっかけに、クラスの大半の意見が「この文章展開では納得できない。」に変わった。文章を書くときの結論と本論での関係が不十分であるということに気付いたのである。

次に、予めリライトし、事例を二つにしておいた教材文を比較させた。そして、児童は、より身近な事例ばかりでなく、一般化した事例も大切であることに気付いた。

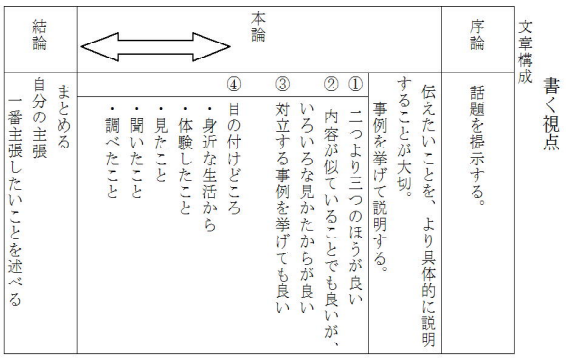
このように、筆者の表現の意図や工夫を読むことが、「書く視点」を作り出すことになった。そして、どのように書くことが説得力のある文章になるのか、児童はとらえることができた。根拠となる事例と結論とを結び付ける述べ方に着目したり、文章構成をしっかりと押さえた書き方の重要性を理解することで、実際の書く学習で生かされるようになった。

そして、適切な文章とはどのような文章なのかを児童が気付き、学習の中から「書く視点」を取り出して行った。児童の気付きによる言葉を、児童と一緒にまとめたものが次の資料５である。

①文章の組み立てを考えて。
②事実と意見とは、きちんと分けて。
③具体的な事例の挙げ方のポイント
　・短く簡単な文章で書くこと
　・様子は詳しく書くこと
　・身近なことから一般的なこと
　・みんなが体験していること
　・見たことや聞いたこと
　・調べて分かったこと
④事例は、二つ以上複数がよい。

資料５　みんなで作った「書く視点」

さらに、この児童とともにまとめた気付きを下記のように整理して、ワークシートに貼り出した。書き手の意図を児童の言葉から整理したものが資料６である。これらの「書く視点」は、それぞれの学習活動のワークシートに貼り付けて、書く学習の際にも、推敲し合う学習の際にも活用するようにさせた。



資料６　子どもたちとまとめた「書く視点」

こうして、複数の教材の中から情報を取り出し、身近な生活と比較することによって、どの子にも自分の考えをもたせることができた。そして、書き手の立場に立ち、教材の序論と結論の関係、本論と結論の関係等を読むことにより、筆者の表現の工夫を読み取ることができた。

また、ここでの書き手の工夫に気付きを活かして、「書く視点」を活かしていこうとする姿勢をもつことができた。

以上のように、複数の教材（新聞記事のマンガ、グラフ）から事実を取り上げて比較することにより、日本語に対する自分の考えをもたせることができた。そして、児童が主体的に筆者の意見や根拠を明確にした書き方や表現の工夫をとらえ、「書く視点」を作成したことは、自分の考えをもつ上で有効であった。

２　教材文や自他の表現のよさや表現の効果について助言し合い、「書く視点」を活用しながら意見文を書くことは、自分の考えをさらに深める上で有効であったか。（見通し２）

まず、適切に意見文を書くために「書く視点」をどのように活用すればよいかの理解をさせるために、教師の自作による二つの文章を取り入れ、比べさせた。そして、「書く視点」を基に、二つの文例を取り挙げ、次の資料７のように、意見文のよさや矛盾点を探させた。このように、よりよい意見文の書き方については、何がどのように書かれているのかを、比較検討することで、より理解を深めることができた。

- 事例ではなく自分の考えや意見が多い。
- 体験した事実がなくて、あまりよく伝わらない。
- 事実と考えが混ざっているのでわかりづらい。
- 事例の数が少ないので、もっと増やすべきだ。
- 根拠となる事例があまり具体的でない。

資料７　二つの文章を比較したときに出てきた改善した方がよいと考えた児童の気付き

児童は、二つの文章を比べることで、根拠に挙げている事例の数を数えたり、事例の中の事実と考えを分けたりすることができた。結論と本論で挙げている事例がどんな関係にあるのか、児童はよく考えていた。そうすることで、一方の文章の方が優れていると気付くようになった。つまり、予め内容（表現方法）に優劣を付けた二つの自作教材を提示したことで、児童は「書く視点」を使ってその表現のよさを簡単に見付け、それぞれに違った文章のよさや矛盾点に気付いていくことができた。下記の写真は、グループごとに、教材の分析を批評をした結果について、意見交流して確かめ合っていく時の様子である。

資料８　二つの文章を比較している様子

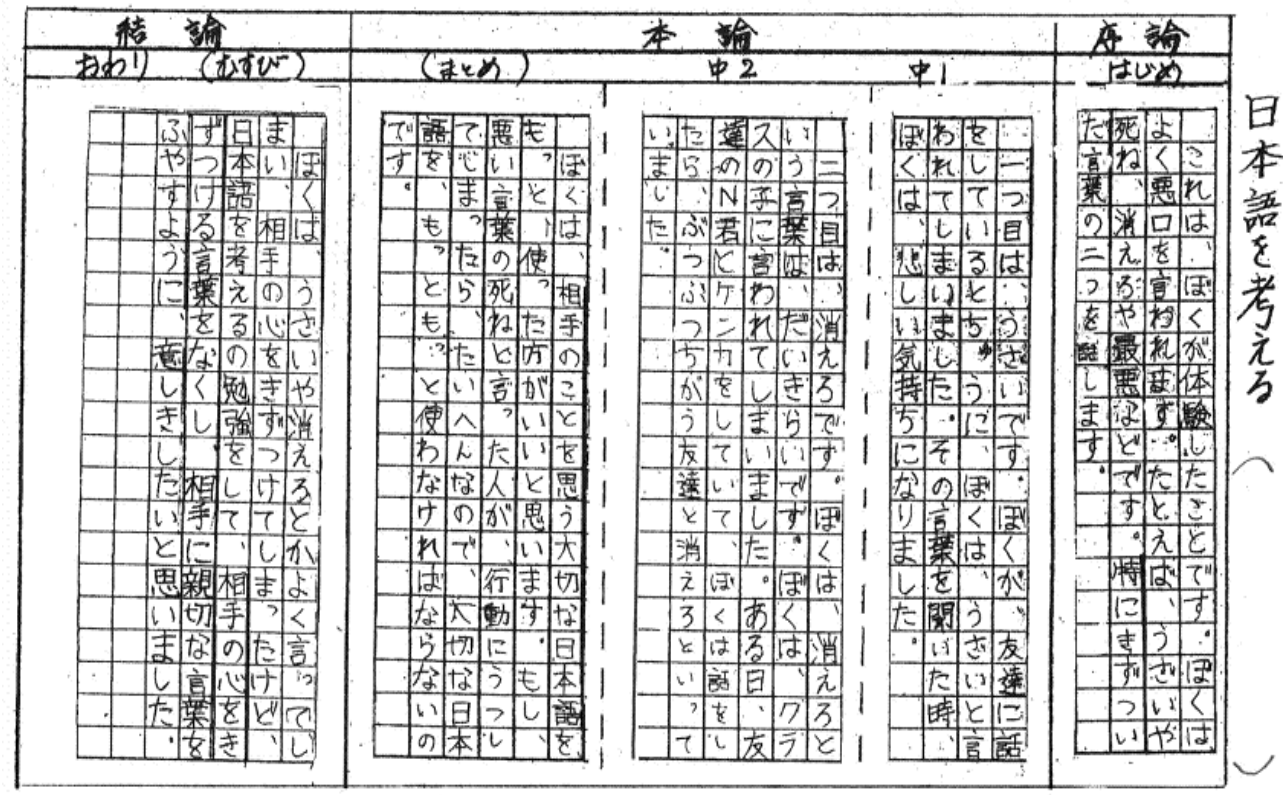
この学習を展開することで、納得できる内容や文章構成にするために、「書く視点」を活用することが有効であると児童は理解できたと考える。

次の学習では、資料９を授業で例文として取り上げることにした。児童全体で「書く視点」に照らし合わせながら、「書く視点」を活用して、書き方を確認し合ったり、文章の表現のよさや工夫点を読み取り、意見交流し合ったりした。その結果、文章構成や、結論と根拠との関係を見事に分かりやすく整理して書いてあったので、具体的で適切な書き方を理解して、自分の意見文と比較しながら評価することができた。

そして、児童の書いた意見文をもとに、文章構成や事例の取り上げ方などを意見交流したことで、「書く視点」の活用の仕方が分かった。

そうすることでさらに、意見文の書き方に迷いがなくなり、内容の個人差はあるが、「書く視点」を活用して、どの児童も書くことができた。

その後、児童は、話し合って推敲する際も、「書く視点」を参考にしながら、自分の意見を様々な角度から付箋に書いて交流していた。誤字や文末表現などにとらわれることなく、文章全体の書き方や構成の工夫としてとらえ、文章全体の整合性を考えることができた。



資料９　良い例として取り上げた児童Ｃの意見文

児童のワークシートを見ると、二つの事例を通して学習したことで、「読むこと」の学習でつかみ深めてきた「書く視点」をしっかり記入できるようになったのが分かる。

また、今までの生活の中での出来事を例示して、現在の考えを加えて、自分の意見としている児童もいた。意見を発表するとき、根拠までうまく関係付けて言えなかったが、結論と根拠、事実と意見、比較や並列など構成を意識しながら、書き上げることができるようになった児童もいた。

以上のように、教材文や自他の表現のよさや表現の効果について助言し合い、「書く視点」を活用しながら意見文を書くことにより、自分の考えをさらに深めることができたと考える。

資料10　推敲して気付いたことを書き込む様子

資料11　交流・推敲している様子

３　「書く視点」を活かして、自分の意見文を確かめ振り返り、推敲したり、交流したりすることは、意見文を適切に書く能力を高める上で有効であったか。（見通し３）

児童は、単元を通して同じテーマをもって臨んだことで、児童同士の意見文を交換し合い、「書く視点」を基に、その表現のよさを簡単に見いだすことができた。また、「書く視点」は、友達同士で推敲し合う学習でも有効な手だてとなった。自分の意見文に対するワークシートに貼られた付箋紙には、「事例の内容がよい」「事実とそれに

対する意見が書かれているので、分かりやすい」などの内容があった。また、改善点として事例に対する気持ちは書かれているが、「そのことを通してどう考えているのかを加えた方がよいと思う」など、助言的な内容もあった。

児童は、「書く視点」を活用することで、互いの文章構成全体を見たり、文と文とを関係付けて読んだりして、事実と意見、結論と根拠など、自然と付箋紙に書き込んでいくことができるようになった。

また、推敲の学習では、「日本語について」の意見文をグループごとにどんな工夫を取り入れたのか本人が説明して読み上げた。評価の観点は、もちろん「書く視点」を通してであった。

そして、意見文を書く準備の構成メモから、自分の文章が変容していることを「書く視点」を基に照らし合わせながら確認できた。単元のゴールとしての「書くこと」の意義を確認することができたと言える。

このように、意見文を書くために「書く視点」を明らかにしたことで、児童は、意見文を適切に書く能力を知識・技能として身に付けることができた。相手意識や目的意識をもち、意見文を書く時の手順や表現の仕方を具体的に身に付ける上で、「書く視点」を手だてとしてきたことが、有効なことが分かった。

児童は、「書く視点」を参考に、本論における根拠の書き方にどんな特徴があるのか、筆者が表現の工夫をしているところがどこなのか、などについて意見交流したり、話し合ったりすることで、序論、本論、結論に分けて文章構成についての理解を深めることができた。

資料12　意見交流会の様子

意見交流会では、生き生きと自信をもって取り組む姿が見られ、筋道を立て、根拠をはっきりさせた意見に耳を傾けながら聞くことができた。

次の文章は、児童Ａの意見文である。

日本語を考える

僕は、授業でマンガやグラフについて学習した。それで、日本語が乱れていることを知った。そのグラフの題名は、「日本語を乱す張本人は？」だった。約半分の 50 パーセントがテレビが原因だということだった。では、なぜテレビが日本語を乱しているのだろうか。

あるテレビ番組を見たときのことだ。それに出ていた芸能人が「オもろー」と言った。その時に母さんが「オもろーって何」と聞いてきた。その芸人が言うように「オもろー」は「面白い」の略語らしい。でもそういう言葉も日本語を乱していると思う。

こういう略語を日本人が多く使っている。「ウケる」というのもこれと同じことだ。しかし、マンガなども日本語を乱している張本人ではないだろうか。学習の中で取り扱ったマンガを読むと、「ウザイ国」「やばい国」があり、他の言葉が使えない約束だった。「うざい」とか「微妙」や「別に」しか言えないので、仕方なくそれらの言葉を言ったら相手に嫌われてしまって、かわいそうだと思った。マンガの筆者は、そのような言葉を使ってはいけないということを伝えたかったのだと思った。

最近は、こういう言葉が多くなってきている。しかし、よい言葉も日本語には大変多い。だから、よい言葉をたくさん使い、悪い言葉は使わないようにしたいと思う。昔の人のように感謝する言葉をたくさん話すようにしたら、新聞記事のグラフのように「日本語の乱れ」は減らしていけると思う。

資料13　児童Ａの意見文

以上のように、「書く視点」を活用することで、適切な意見文の書き方について理解するだけでなく、自分の意見文を確かめ振り返り、推敲したり、交流したりすることは、意見文を適切に書く能力を高めることにつながったと考える。

そして、学習の三過程を通して「書く視点」を作成し活用してきたことで、グループ内での推敲や意見文の交流など、意欲的に取り組み、意見文の適切な書き方を学んできた。児童が読み手や書き手の立場から「書く視点」を作成し活用することが、意見文を適切に書く能力を育てる上で有効であることが明らかになった。

単元の最後に、学習全体を振り返って、児童たちは次のような感想を書いた。

- 日本語の特徴を考えたり、日本語について自分の意見を書いたりできて、すごく楽しかった。
- 体験したことを根拠にして書くことは、分かりやすいことが分かった。
- テレビの事例から、日本語について書いていたので、分かりやすい意見文になっていると思った。
- 昔からの言葉の大切さが学習を通してよく分かったし、自分の意見をもつことができた。
- 自分の疑問や思ったことから、実際の例を挙げて考えをまとめているので、分かりやすいということが分かった。
- 題名と書かれている内容は一致しているとよいことが分かった。それに、題名はとても重要であると思った。

資料14　児童の感想

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

本研究では、「読むこと」と「書くこと」の二つの領域を関連させ、書くために読むという単元を構想した。このことにより、筆者が伝えたい内容をどのように書き、工夫しているのかをとらえ、現在の学習指導要領で求められている「習得し活用」しながら意見文を書く効果的な学習活動を明らかにすることができた。

(1)　「書く視点」の作成について

読むことの学習活動で、「書く視点」を取り出したり、明らかにしたりすることができた。それは、読み進めながら、書くことの基礎・基本を「習得する」ことであり、意見文を書く活動につなげる「活用」にあたるものとなった。筆者の考えを理解するだけにとどまらず、自分ならばこのように書く方が、より分かりやすいといった意見文の適切な書き方に着目した考えをもつこともできた。同時に、自分の意見文を書きたいという意欲や関心を高めることもできた。

(2)　「書く視点」の活用について

意見文を書き上げる過程に、「書く視点」を活用し、自分の考えを確認したり、具体的に意見文の書き方の手順や方法を確かめたりすることができた。そして、意見文を書き上げ、その内容について振り返ったり、推敲したりする上で、「書く視点」は重要な手だてとなることも明らかになった。また、「書く視点」は、「どこを工夫しているのか。」あるいは、「自分なら、このように書くほうがよいと考えた。」など、評価し合うことの手だてとしても有効であった。

(3)　意見文を適切に書く能力について

児童は、互いの意見文の内容を確かめ合ったり、自分が書いた内容や構成について、評価してもらったり交流したりすることで、学習を振り返り、自分の考えをまとめ、意見文として適切に表現していくことができた。

このように、「書く視点」を作成して、活用することによって、児童は自分の意見文を書く学習に意欲的に主体的に取り組み、適切に書く能力を高めることができた。

２　課題

(1)　「書く視点」の作成について

今回の意見文は、全員が同じテーマで書いたため、指導事項の「選材や取材」にかかわる「書く視点」は、ふれられなかった。今後は、学習指導過程を通して、できるだけ多くの指導事項について「書く視点」の作成を図っていきたい。

(2)　「書く視点」の活用について

今後は、様々な文種に応じた「書く視点」や複数の教材や資料などを組み合わせた学習における「書く視点」など、発展的な「書く視点」の活用を考えていきたい。

＜参考文献＞

・長崎　伸仁　編著
　『表現力を鍛える説明文の授業』（明治図書）
・市毛　勝雄　著
　『論理的文章の書き方』（明治図書）
・群馬大学と群馬県教育委員会との連携事業
　群馬プロジェクト　編
　『小中学校９年間を見通した「書く能力」の系統と実践事例集の作成』（群馬大学と群馬県教育委員会との連携事業報告書）